

かわるかえる

世の中は変わっていく。その流れを進める人、立ち止まって新たな道を模索する人…。自分が信じる明るい未来へ向かって、扉を開く。そんな人々の決断と行動に目を凝らし、伝えていきたい。

「これが何度もの挫折を経て75歳になったおやじの最後の挑戦、パンガスリミです。高知県黒潮町の自宅の車庫を改造した小さな工場で、明神宏幸(75)が箱の中から真っ白に凍った魚のすり身の板を取り出した。原産国はベトナム、箱には緑の魚をデザインしたエコラベルが付いていた。

ラベルは、国際機関の水産養殖管理協議会(ASC)が、環境や資源管理に配慮したと認めた養殖業だけに与えるお墨付きだ。カツオの一本釣り漁業に長くかわり「乱獲で魚がどんどん減っている」と

次世代シーフード

危機感を募らせる明神の強いこだわりの一つだ。明神は、別の国際機関の海洋管理協議会(MSC)の認証を2009年にカツオ漁で



「カツオは乱獲が深刻だった。しかも巻き網で取った魚を一本釣りのカツオだと称して売る業者まで出てきた。当時を振り返る。

持続可能な水産命の限り

は世界で初めて取得したこと知られる。乱獲のない持続可能な漁業と認められ、海のエコラベルを付けて売られるようになった。

認証取得には長い時間と多額の資金がかかったが「次世代においてカツオを残すにはこれしかないと思った。米留学を終えて帰国した長男の弘幸が販売ルート拡大に取り組み、新商品のカツオガリックステーキも開発して事業は順調に伸びていった。

だが、突然の悲劇が明神を襲う。弘幸の妻から「夫が転落事故でなくなった」と電話で知らされたのは10年10月のことだった。

くじけそうだった明神は弘幸の手がけていた話の輸出事業だった。「環境保全に関心が高まっているので、MSCのカツオ製品は国際市場で競争力を持つ」と提案すると、大手商社が関心を示し、宮城県気仙沼市の工場で缶詰を製造して米国に輸出することに決まった。

当時、拠点にしていた焼津市で、商社の担当者らと契約を交わした直後だ。地面が激しく揺れた。11年3月11日、テレビは気仙沼市を襲った巨大津波が漁船を押し流す情景を伝え、闇の中、火の海となった街を映し出した。明神の夢は濁流と炎の中に消え去った。



カツオの一本釣りにこだわった明神宏幸。数々の挫折を乗り越え、いま世界へ。「でもカツオが好きじゃ、うまいきに」と満面の笑みを見せた＝高知県黒潮町

不屈の75歳 ナマズに託す夢

心の中で何が折れる言がした。「一番大切な息子を持つていかれた上に」。死のうかとも思ったが、息子が残った孫の顔を見ると、それはできなかった。

「前懸けでやってきたMSCのカツオを、神様ももつやめると言っている。翌年、明神の会社は倒産、廃業した。

だが、2年後、多額の借金を抱え故郷に戻った失意の宏幸に、亡き息子が残したガリックステーキに関する問い合わせがあり、ベトナムに渡った宏幸が目にしたのは、アジアの大河、メコン川に沿って建設されたナマズの一種、パンガシウスの巨大な養殖場だった。

しかも、企業はASCだけでなく欧州の厳しい衛生基準など輸出に必要な国際認証を多く取得していた。持続可能な水産物の普及に命を懸けてきた店の思いが再び、頭をもたげた。

「SURIMIは既に国際語だし、日本発のカニカマも世界中で売れている」。海の



ベトナム産パンガスリミを使ったカニカマの試食会。同級生らを招き妻の和歌子(左端)が天ぷら、サラダなどにアレンジして腕を振るい大好評だった＝高知県黒潮町

功した。「単にナマズの切り身を売るだけでなく、付加価値のある製品が輸出できるようにしてあげたい。それに日本の水産加工技術が貢献するなら素晴らしいじゃないか」

12月、明神は自宅に同級生ら3人を招いた。天ぷら、サラダ、ピザ、巻きずし。料理上手の妻和歌子(74)が供したメニューのすべてにパンガスリミのカニカマが使われていた。

社会福祉法人を故郷に設立し、障害者や高齢者を雇ってカニカマを生産、販売するという構想を熱く語る明神。彼が「未来の工場長」と呼ぶ孫の祥真(20)が真っ赤なカニカマをほおぼり「これ、めっちゃうまい」と目を輝かせる。カニカマに込めた明神の不屈の夢が、次世代につながるうたとして。(敬称略)

ASCはその養殖水産物版だ。欧米を中心に普及が進み、世界各地で認証を取得する漁業者が増え、市場も広がっている。

日本での認知度は低いだが、2020年に宮城県気仙沼市の漁業者が大西洋クロマグロ漁で世界初のMSC認証を取得するなど、徐々に広がりを見せている。

乱獲や環境破壊なしに漁獲された水産物だと認める厳密な基準を定め、クリアした製品にエコラベルを付けて売る。消費者がラベルの付いた製品を選んで買うことで、環境保全や資源保護に熱心な漁業者を支援できる。これが水産物エコラベルの考えで、MSCのラベルが国際的に最も信頼されている。